
僕らは互いに片思いをし続ける

佐智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らは互いに片思いをし続ける

【Nコード】

N7527T

【作者名】

佐智

【あらすじ】

中学を卒業してから10年後、立海大附属テニス部の同窓会が開かれていた。仁王は付属大には行かず、久しぶりの再会も多い。そんな中、彼は元ダブルスパートナーとの会話を楽しんでいた。10年後だから言える本音。

(前書き)

ほぼ会話文です。28とも82ともいえぬ何か

男同士とかそんなことを気にしたことはなかった。

ただこの想いは言わないほうがいいのだろうと、きっと今までどおりが一番なんだろうと、なんとなく思っていた。

気がつけば卒業していて、会わなくなって十年。薄れゆく君を感じていた。あの頃のような気持ちはもうない。彼女を作って、新しい恋愛をして、楽しんでいる。

——もう、時効だろう。微かに残っているコレをばらしてしまっても、いい気がした。

「お久しぶりです」

「ああ」

「髪色、落ち着きましたね」

「さすがにあれで仕事はできないからな」

「……喋り方も変えたんですか？」

「もう忘れたよ。毎日毎日敬語を使っているうちに分からなくなっ
た」

「……………」

「柳生？」

「……十年って長いですね」

「当たり前だろ。むしろ柳生が変わってなさすぎだ」

「そうですかね」

「そうだよ」

「皆多少変わってしまっていますけど、仁王くんが一番ですよ」

「……今日は高校生な仁王くんに戻るとするかのう？」

「……やっぱりそれがしつくりきますね。私の中の仁王くんは高校

生で止まっていますから」

「会わなかったんじゃないから、当たり前じゃ」

「……本当は連絡しようと思ったんですよ」

「プリッ？ 結婚したことならしつとるよ？」

「はい？」

「幸村が楽しそうに報告してきたんじゃない」

「幸村くんとは交流してたんですか」

「ただ幸村はいいじめ相手が欲しかっただけじゃろーな」

「……それは分かりますが、私が連絡しようとしたのはもっと前で
す」

「？」

「私、仁王くんのこと好きだったんですよ。むしろ今でも好きで
すよ」

「仁王くんの不倫のおさそいかの？」

「そういうわけじゃありません。もちろん彼女のこととは愛しています
よ。ただ久しぶりに会って、やっぱり好きだなと思っただけです」

「俺も柳生のこと好きじゃよ」

「ありがとうございます」

「両思いなのに俺ら、つきあわんの？」

「仁王くんにも彼女いるでしょう？」

「……なんでわかったんじゃない」

「指輪してますよ」

「あー」

「それくらい気づきます」

「……なんで柳生は高校生の時、言ってくれなかったんじゃない。そし
たら付き合ってたんじゃないか？」

「そっくりそのまま、貴方に返します」

「ばれとったか」

「理由是一緒なんじゃないんですか」

「……俺に明確な理由はなかったよ」

「そうですね、あえて無理矢理言葉にするなら、テニスに必要なかったからでしょうか」

「お前さんらしいの」

「私たちにとって、テニスは絶対でしたからね。言い訳には申し分ないでしょう」

「なつかしいのう」

皮肉な話だ。

俺がテニスに誘ったから出会えたのに、テニスのせいで想いが叶うことはなかった。

「私はテニスに感謝してますよ」

「なんじゃ、俺はちよつと今憎んだっちゅーのに」

「言っただでしょう、言い訳だと。けれど、テニスのおかげで仁王くんに会ったのは事実ですから」

「面白いくらいテニスにはまってたの」

「もっといえば、仁王くんとテニスに夢中だったんでしょね」

「いつの間に気障紳士になったんじゃ……」

「十年は長いですよ」

「……なあ、柳生」

「はい」

「またテニスする気はあるかのう？」

「……一応ラケットはありますが」

「もう少しテニスに働いてもらうんじゃよ、また十年後とか言ったらシャレならん」

「結局、テニスを理由にしか会えないんですね」

「俺らしいじゃろ？」

「ええ。いつ頃暇なんですか？」

「月末かのう。夜ならいつでもOKじゃが」

「今月末にしましょう」

「りょーかい」

「仁王くん」

「ん？」

「本当に好きですよ」

自然に発せられたとしか思えない口調。
好きでした、ではなく。

「お前さんにはかなわんのう」

「私は最初から仁王くんに負けてますから」

「……俺も好きじゃよ。女に飽きたらいつでもきんしゃい」

「万が一離婚して、なおかつ仁王くんが指輪をしなくなったら考え
ます」

「……素直にありえんっていいんしゃい」

「何が起るか分かりませんよ」

「今更何も起こらんよ」

「……そうかもしれないですね」

「？」

「どんなに薄れても、この気持ちは消えそうにありませんから」

「……変わらない、か」

「はい」

三週間後、再び会ってテニスをした。

更に一ヶ月後、俺が結婚した。

半年後、柳生の奥さんに子供ができた。

そして俺は髪が伸びてきて、時々柳生とテニスをするときの一つ
にまとめるようになった。

テニスをしている時だけ、学生時代の自分でいられる気がした。

——きつと柳生と踏み締めるテニスコートには時が流れず、永遠に俺と柳生の中に取り残されるのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7527t/>

僕らは互いに片思いをし続ける

2011年6月8日03時41分発行